

## 医療系（作業療法）学生の国際交流に関する意識調査 －本学学生と台湾学生との比較より－

白石英樹<sup>1)</sup>，董 玫伶，Neil David Parry<sup>2)</sup>，周 映君<sup>3)</sup>

<sup>1)</sup> 茨城県立医療大学 保健医療学部 作業療法学科

<sup>2)</sup> 茨城県立医療大学 保健医療学部 人間科学センター

<sup>3)</sup> 高雄医学大学 健康科学院 職能治療学系

### 要旨

茨城県立医療大学では、平成27年（2015年）より台湾の高雄医学大学との間で国際交流を行っている。しかし、国際交流の継続には、相互の国際交流に関する意識や考えについて理解することが重要である。今回、本学と高雄医学大学の作業療法学科学生（OT学生）を対象に、国際交流に関する意識調査を実施したので考察を加え報告する。

**【対象】** 本学のOT学生111名と高雄医学大学のOT学生113名を対象とした。

**【方法】** 国際交流に関する意識について、アンケート調査票を作成し無記名にて回答を得た。

**【結果】** 海外への渡航経験や外国人とのコミュニケーションができる言語は台湾学生に比べ本学学生において有意に少なかった。また、国際交流に関する多くの質問で、本学学生は台湾学生に比べ有意に意識が低かった。

**【まとめ】** 将来、諸外国の医療スタッフとの協働の可能性も考えられ、学生時代の国際交流を通じて外国人とのコミュニケーションや共有時間を多くしていくことが重要と考える。

**キーワード：** 国際交流，作業療法学生，日本，台湾，質問紙調査

### 【はじめに】

日本においては、少子高齢化社会の本格化に伴う医療・福祉・介護に携わる人材不足や医療費の抑制、さらに地域における独居（孤立）高齢者や認知症者の増加など、対応しなければならない問題が山積している。こうした日本における人材不足への対応として2008年より経済連携協定（EPA）に基づき、アジア諸国から介護領域や看護領域において外国人介護士や看護師の受入れが始まり、医療系環境においてもグローバル化がすすめられてきている。現在までに、日本において受入れがされている外国

人医療系専門職は、看護職候補で1,203名、介護職候補で3,492名となっており、すでに平成29年度では累計4,700人を超える外国人介護士や看護師候補者を受け入れてきている<sup>1)</sup>。また、国際厚生事業団の報告<sup>2)</sup>によると、平成29年までに日本の介護分野には約3,500人の外国人介護職員がおり、看護分野でも約350人の外国人看護師が国家試験に合格し<sup>3)</sup>、日本の医療機関や施設で働いている。このような医療系環境の変化の中で、医療系養成校においても、臨床現場などで諸外国の専門職との連携・協働ができる医療技術専門職業人の育成が急務となってきた。

すでに看護系大学や専門学校では、カリキュラムの中に国際保健や国際看護などを取り入れ、あるいは協定を結んでいる海外の大学での単位取得などを可能にしている大学も多くある<sup>4)</sup>。医療福祉系大学においても短期海外研修プログラムなどにより、海外の福祉系大学や医療福祉施設への訪問による交流を通じて学生への教育効果の検討などが行われてきている<sup>5)</sup>。また、医療系以外の大学（教育系大学）においても世界で活躍できる人材の育成のため、英語教員だけではなく全教員がグローバルなものの見方や考え方を身に付けるために様々な取り組みを行っている<sup>6)</sup>。医療系専門職である作業療法士の養成においても、(社)日本作業療法士協会の「作業療法士教育の最低基準」改訂第3版のなかで、教育目標に「作業療法の国際的な動向を理解し、将来国際的に貢献できる基礎的な能力を身に付けること<sup>7)</sup>」を掲げている。

本学でも平成27年（2015年）から台湾の高雄医学大学作業療法学科と本学作業療法学科の間で学科間協定を結び、台湾学生の短期留学を受け入れ、本格的な国際交流を歩み出した。しかし、こうした国際交流を持続していくには本学学生や教職員の意識改革は欠かせず、さらに他国留学生の受け入れのみではなく、本学学生・教職員の海外留学（短期）・訪問など「双方向的交流」が重要不可欠である。

医療系専門職養成においても海外の専門職との協働や連携、さらには国際貢献のできるグローバルな人材の育成にはこうした国際交流を持続し、より促進していくことは重要であり、本学学生の国際交流に関する意識を早期に把握することは必要不可欠である。また交流を行う台湾学生の国際交流への意識や期待にはどのようなものがあるのかを理解することは、今後の国際交流プログラムの検討や更なる発展へ有用な情報となるものと考えられる。

今回、本学の作業療法学科学生と高雄医学大学の作業療法学科学生に対し国際交流に関する意識についてアンケート調査を実施し、比較分析を行った。

本調査研究は、本学学生の国際交流促進やグローバル人材育成への課題、本学の取り組むべきあり方について検討することを目的とし、若干の知見を得たので報告する。

## 【対象】

茨城県立医療大学（Ibaraki Prefectural University of Health Sciences：IPUHS）作業療法学科の1～3年生合計126名と台湾の高雄医学大学（Kaohsiung Medical University：KMU）作業療法学科の1～3年生合計120名を対象とし、国際交流に関する意識調査を実施した。

本調査研究は、本学倫理委員会へ申請し承認を得て（承認番号：6迅速審査）実施した。また対象者へは調査研究への説明を行い、同意を得て実施した。

## 【方法】

国際交流・国外留学に関する意識調査票（アンケート調査票）を作成・配布し、無記名にて回答を得た。台湾学生へは中国語によるアンケート調査票を作成し回答を得た。アンケート調査において、調査票の回答をもって、対象者からの同意とした。本学学生への調査は平成28年（2016年）6月に実施し、台湾学生への調査は平成28年（2016年）3月に高雄医学大学を訪問した際に実施した。

国際交流に関するアンケート調査では、1) 海外への渡航経験や外国人とのコミュニケーションとその機会について（8問）、2) 国際交流・国外留学に関する意識や関心・動機など（20問）、3) それぞれの大学における国際交流に関する取り組み（4問）、4) 国際交流に関する気持ちや関心の程度（13問）について質問し、回答を得た。これら質問1)～3)の計32問については、設定された選択肢の中から回答してもらい、そのうち程度に対する質問には5段階尺度（例：5.非常に重要、4.とても重要、3.重要、2.多少重要、1.どちらかといえば重要、など）にて回答を求めた。質問4)の13問については、VAS（Visual Analogue Scale）法を用いて回答を得た。

各質問回答についての2群間比較には $\chi^2$ 検定を用い、その後の検定としてHabarman残差分析（調整済み標準化残差：以下、残差値）を行った。また国際交流への気持ちや関心の程度に関する質問への回答（5段階尺度やVAS法）についての2群間比

較にはMann-Whitney U検定を行った。統計解析には、IBM社製SPSS ver 22.0を用い、危険率は5%とした。

## 【結果】

### 回収率について

アンケート調査票は、本学作業療法学科の1年～3年生の合計111名（男性30名・女性81名）とKMU作業療法学科の1年～3年生の合計113名（男性22名・女性91名）より回答を得ることができた。回収率は、茨城県立医療大学では88.1%で、高雄医学大学では94.2%であった。これらを分析対象として国際交流に関する意識について分析を行った。

### 1) 海外への渡航経験や外国人とのコミュニケーションとその機会について

「海外への渡航経験（回数）」についての回答では、本学学生では111名中42名が渡航経験（37.8%）を有し、KMU学生では113名中93名が渡航経験（82.3%）を有していた。また、この渡航経験（回数）において、本学学生とKMU学生では有意な違いが示され（ $\chi^2=68.06$ ,  $df=4$ ,  $p<.001$ ）、特に4回以上の渡航経験については、KMU学生において多かった（残差値=6.9）（表1）。渡航先としては、KMU学生では、アジア圏（日本、中国、韓国、マレーシア、

シンガポールなど）が89名と最も多く、次いで北米（アメリカ、カナダ）22名やオセアニア（オーストラリア、ニュージーランド）21名、欧州（イタリア、ドイツ、ベルギー、オランダ、フランスなど）16名で多かった。本学学生では、北米（アメリカ、カナダ、ハワイ、グアムなど）が30名と最も多く、次いでアジア圏（韓国、台湾、中国など）15名や欧州（イギリス、イタリア、フランスなど）7名、オセアニア（オーストラリア）4名であった。

「外国人とコミュニケーションができる言語」に関する質問では、本学学生において「ある」と回答したのが50名（45.0%）であったが、KMU学生では108名（95.6%）であった。本学学生に比べKMU学生において、外国人とコミュニケーションができる言語を有意に持っていた（ $\chi^2=68.79$ ,  $df=1$ ,  $p<.001$ , 残差値=8.3）（表2）。また「外国人との交流機会の有無」についても有意な違いが示され、「持っている」との回答ではKMU学生（67名, 59.3%）が本学学生（43名, 38.7%）よりも有意に多かった（ $\chi^2=9.47$ ,  $df=1$ ,  $p=.002$ , 残差値=3.1）（表3）。

### 2) 国際交流・国外留学に関する意識や関心、動機などについて

「国際交流・留学を意識したことがあるか」との問いでも、「ある」との回答は本学学生（43名, 38.7%）に比べKMU学生（104名, 92.0%）におい

表1. 海外への渡航経験（回数）

	IPUHS			KMU		
	n	%	調整済み残差*	n	%	調整済み残差*
1 回	19	17.1	-0.9	25	22.1	0.9
2 回	12	10.8	0.7	9	8.0	-0.7
3 回	9	8.1	-1.2	15	13.3	1.2
4 回以上	2	1.8	-6.9	44	38.9	6.9
無し	69	62.2	6.8	20	17.7	-6.8
計	111	100		113	100	

$\chi^2$ 値=68.06, 自由度=4,  $p<.001$

\*調整済み標準化残差値を表示。この値は、絶対値が1.96以上の場合、 $P<.05$ で有意。

表2. 外国人と会話（コミュニケーション）ができる言語の有無

	IPUHS			KMU		
	n	%	調整済み残差	n	%	調整済み残差
あ る	50	45	-8.3	108	95.6	8.3
な い	61	55	8.3	5	4.4	-8.3
計	111	100		113	100	

$\chi^2$ 値=68.79, 自由度=1,  $p < .001$

表3. 外国人と交流する機会の有無

	IPUHS			KMU		
	n	%	調整済み残差	n	%	調整済み残差
持っている	43	38.7	-3.1	67	59.3	3.1
持っていない	68	61.3	3.1	46	40.7	-3.1
計	111	100		113	100	

$\chi^2$ 値=9.47, 自由度=1,  $p = .002$

て有意に多かった ( $\chi^2=70.51$ ,  $df=1$ ,  $p<.001$ , 残差値=8.4) (表4)。

「国際交流・留学への関心・気持ち」については, 2群間に有意な違いが示され ( $\chi^2=68.82$ ,  $df=4$ ,  $p<.001$ ), 「非常に関心がある」との回答はKMU学生に多かった (残差値=5.8)。逆に, 「どちらとも言えない」 (残差値=5.3), 「関心がない」 (残差値=3.7), 「全く関心がない」 (残差値=2.5) においては本学学生において多かった (表5)。

「国際交流の自身への意義」については, 「とても意義がある」「意義がある」との回答は, KMU学生に多く ( $\chi^2=31.06$ ,  $df=3$ ,  $p<.001$ , 残差値=2.5, 2.0), 「どちらとも言えない」との回答では本学学生において多かった (残差値=5.3) (表6-1)。その意義に

おいて「自身にとってどのような点」に意義を感じているのかについて5段階尺度 (5:非常に重要である~1:どちらかといえば重要である) で尋ねたところ, 「国際感覚が学べる」との回答で有意差が示され, KMU学生で重要度が高かった ( $z=-2.435$ ,  $p=.015$ )。また, 「海外 (外国) へ行くときに役立つ」との回答でも, KMU学生のほうが本学学生より有意に重要視していた ( $z=-2.223$ ,  $p=.026$ ) (表6-2)。

「どのような国際交流・留学をしたいと考えているのか」との問いにも有意な違いが示され ( $\chi^2=72.04$ ,  $df=6$ ,  $p<.001$ ), 「自国以外の国へ行って, 専門的な知識・技術などの研修に参加したい」 (残差値=4.1), 「自国の中で, 外国人からその国の言語, 文化, 価値観などを学びたい」 (残差値=2.4) と回答

表4. 国際交流または留学を意識した経験

	IPUHS			KMU		
	n	%	調整済み残差	n	%	調整済み残差
あ る	43	38.7	-8.4	104	92.0	8.4
な い	68	61.3	8.4	9	8.0	-8.4
計	111	100		113	100	

$\chi^2$ 値=70.51, 自由度=1,  $p < .001$

表5. 国際交流または留学への関心・気持ち

	IPUHS			KMU		
	n	%	調整済み残差	n	%	調整済み残差
非常に関心がある	9	8.1	-5.8	47	41.6	5.8
関心がある	48	43.3	-1.6	61	54.0	1.6
どちらとも言えない	35	31.5	5.3	5	4.4	-5.3
関心がない	13	11.7	3.7	0	0.0	-3.7
全く関心がない	6	5.4	2.5	0	0.0	-2.5
計	111	100		113	100	

$\chi^2$ 値=68.82, 自由度=4,  $p < .001$

表6-1. 国際交流の意義

	IPUHS			KMU		
	n	%	調整済み残差	n	%	調整済み残差
とても意義がある	27	24.8	-2.5	46	40.7	2.5
意義がある	44	40.4	-2.0	61	54.0	2.0
どちらとも言えない	36	33.0	5.3	6	5.3	-5.3
意義がない	2	1.8	1.4	0	0.0	-1.4
全く意義がない	0	0.0		0	0.0	
計	109	100		113	100	

$\chi^2$ 値=31.06, 自由度=3,  $p < .001$

表6-2. 国際交流において意義ある点

	IPUHS	KMU	z値	有意確率
	中央値〈四分位〉(n)	中央値〈四分位〉(n)		
国際感覚が学べる	4〈4-5〉(69)	4〈4-5〉(108)	-2.435	.015
自分の価値観や考えの幅を広げることができる	5〈4-5〉(67)	5〈4-5〉(106)	-1.682	.093
海外へ行くときに役立つ	4〈3-5〉(68)	4〈4-5〉(104)	-2.223	.026
外国人との意見交換・情報交換の際に役立つ	4〈3-5〉(67)	4〈4-5〉(106)	-1.671	.095
外国人の友だちをつくる際に役立つ	4〈3-5〉(67)	4〈4-5〉(105)	-1.837	.066
その他	4〈2.25-4.25〉(2)	5〈3-5〉(6)	-0.394	1.00

(重要度) 5:非常に重要である. 4:とても重要である. 3:重要である.  
2:多少重要である. 1:どちらかといえば重要である.

したKMU学生は多かった。「国際交流または留学をしたいと考えていない」との回答には、本学学生が多かった(残差値=6.7)(表7)。

「国際交流または国外留学するために今現在行っている(準備している)こと」について尋ねたところ、2群間で有意な違いが示され( $\chi^2=136.26$ ,  $df=5$ ,  $p<.001$ ),「英語(英会話)の勉強」(残差値=5.2),「外国の文化や価値観などの勉強」(残差値=4.4),「外国へ行くための資金集め(バイト・貯金など)」(残差値=3.8)でKMU学生において多かった。一方,「準備していない」(残差値=11.5)との回答においては本学学生において圧倒的に多かった(表8)。

国際交流・国外留学を考えている場合に,なかなか進められない(障壁となっている)理由について

5段階尺度(5:非常に問題となる~1:どちらかといえば問題となる)にて尋ねたところ,「金銭的問題」( $z=-5.876$ ,  $p<.001$ ),「言語的問題」( $z=-6.082$ ,  $p<.001$ ),「自分の問題」( $z=-2.180$ ,  $p=.029$ ),「環境の問題」( $z=4.093$ ,  $p<.001$ )において,有意に問題になる(なっている)と考えているのは本学学生であった(表9)。

「将来,海外への留学・就職について」との問いにも2群間で有意な違いが示され( $\chi^2=126.05$ ,  $df=1$ ,  $p<.001$ ),「はい」との回答は本学学生(13名, 11.7%)に比べ圧倒的にKMU学生(98名, 86.7%)に多い結果であった(残差値=11.2)(表10)。

更に,上記質問にて「はい」と回答した学生に対して,「海外留学や就職を希望する目的」について尋ねたところ, KMU学生では「自分の知識や技術

表7. 国際交流または留学の希望内容

(複数回答)	IPUHS			KMU		
	n	%	調整済み残差	n	%	調整済み残差
自国以外の国へ行って, いろいろな活動をしたい	21	18.9	-0.9	71	62.8	0.9
自国以外の国へ行って, その国の言語, 文化, 価値観などを学びたい	56	50.5	3.2	100	88.5	-3.2
自国以外の国へ行って, 専門的な知識・技術などの研修に参加したい	8	7.2	-4.1	81	71.7	4.1
自国の中で, 外国の人といろいろな活動をしたい	20	18.0	0.0	56	49.6	0.0
自国の中で, 外国人からその国の言語, 文化, 価値観などを学びたい	15	13.5	-2.4	76	67.3	2.4
その他	1	0.9	1.7	0	0.0	-1.7
国際交流または留学をしたいと考えていない	17	15.3	6.7	1	0.9	-6.7

$\chi^2$ 値=72.04, 自由度=6,  $p<.001$

表8. 国際交流または留学に向けて行っていること(準備)

(複数回答)	IPUHS			KMU		
	n	%	調整済み残差	n	%	調整済み残差
英語(英会話)の勉強	8	7.2	-5.2	60	53.1	5.2
外国の文化や価値観などの勉強	2	1.8	-4.4	34	30.1	4.4
外国人がいるサークルやクラブへの参加	2	1.8	-0.3	4	35.4	0.3
外国へ行くための資金集め(バイト・貯金など)	10	9.0	-3.8	49	43.4	3.8
準備していない	91	82	11.5	23	20.4	-11.5
その他	0	0.0	-2.4	9	8.0	2.4

$\chi^2$ 値=136.26, 自由度=5,  $p<.001$

表9. 国際交流または留学が進められない理由

	IPUHS		KMU		z値	有意確率
	中央値 <四分位> (n)		中央値 <四分位> (n)			
金銭的問題	5 <5-5> (73)		4 <3-5> (109)		-5.876	$p < .001$
言語的問題	5 <4-5> (73)		3 <2-4> (108)		-6.082	$p < .001$
方法的問題	3 <3-4> (64)		3 <2-4> (100)		-1.553	.12
自分の問題	3 <3-4> (66)		3 <2-4> (102)		-2.180	.029
環境の問題 (家庭や学校, カリキュラム)	4 <3-4.25> (66)		3 <2-4> (95)		-4.093	$p < .001$
その他	(0)		4 <3-4> (3)			
国際交流または留学は考えていない	1 <1-1> (27)		(1)		0.000	1.00

(重要度) 5:非常に問題となる. 4:とても問題となる. 3:問題となる.  
2:多少問題となる. 1:どちらかといえば問題となる.

表10. 将来, 海外への留学・就職の希望

	IPUHS			KMU		
	n	%	調整済み残差	n	%	調整済み残差
はい	13	11.7	-11.2	98	86.7	11.2
いいえ	98	88.3	11.2	15	13.3	-11.2
計	111	100		113	100	

$\chi^2$ 値=126.05, 自由度=1,  $p < .001$

などをより高めたいため」(84名, 85.7%), 「海外で暮らしてみたいため」(83名, 84.7%) といった理由の学生が多かった(表11)。

「経済的負担がなければ海外研修へ参加したいか」との問いにおいても2群間で有意な違いが示され

( $\chi^2=55.64$ ,  $df=4$ ,  $p<.001$ ), KMU学生において「ぜひ参加したい」(残差値=5.2)が多く, 逆に「あまり参加したくない」(残差値=3.2)「全く参加したくない」(残差値=2.9)との回答は, 本学学生に多かった(表12)。

表11. 海外留学や就職を希望する目的

(複数回答)	IPUHS		KMU	
	n	%	n	%
自分の知識や技術などをより高めたいため	9	69.2	84	85.7
国際的に活躍できる人間になりたいため	5	38.5	25	25.5
国際的に困っている人を助けたいため	4	30.8	22	22.4
海外で暮らしてみたいため	6	46.2	83	84.7
海外で友達をつくりたいため	1	7.7	42	42.9
その他	0	0.0	4	4.1

$\chi^2$ 値=6.93, 自由度=5,  $p = .026$

表12. 海外での学生研修（経済負担無）への参加希望

	IPUHS			KMU		
	n	%	調整済み残差	n	%	調整済み残差
ぜひ参加したい	17	15.4	-5.2	54	47.8	5.2
参加したい	39	35.5	-1.5	51	45.1	1.5
どちらでもない	32	29.1	4.7	6	5.3	-4.7
あまり参加したくない	14	12.7	3.2	2	1.8	-3.2
全く参加したくない	8	7.3	2.9	0	0.0	-2.9
計	110	100		113	100	

$\chi^2$ 値=55.64, 自由度=4,  $p < .001$

### 3) それぞれの大学における国際交流に関する取り組みについて

「自分の大学の国際交流への意識・取り組みについてどのように感じているか」を尋ねたところ、2群間に有意な違いが示され ( $\chi^2=18.67$ ,  $df=4$ ,  $p=.001$ ), 「意識し、意欲的に取り組んでいる」(残差値3.1) の回答はKMU学生で多く、逆に「どちらでもない」(残差値=2.6), 「あまり意識しておらず、意欲的に取り組んでいない」(残差値=2.0) の回答においては本学学生で多かった(表13)。

また、国際交流において「今後、自分の大学へ期待する取り組み」について聞いたところ、2群間に有意な違いが示され ( $\chi^2=28.83$ ,  $df=5$ ,  $p<.001$ ), 「国際交流セミナー・シンポジウムの開催」(残差値=2.8) をKMU学生は多く期待していたが、本学学生では「海外の学生研修(留学生)の受け入れ」(残差値=4.2) を多く期待していた(表14)。

「自分の大学の学生の国際交流への意識・意欲をどのように感じているのか」との問いに、2群間で有意な違いがあり ( $\chi^2=49.42$ ,  $df=4$ ,  $p<.001$ ), 「とても意識している・意欲的である」(残差値=2.4), 「意識している・意欲的である」(残差値=5.7) との回答はKMU学生に多く、逆に「どちらでもない」(残差値=4.2), 「あまり意識していない・意欲的でない」(残差値=2.9), 「まったく意識していない・意欲的でない」(残差値=2.5) の回答は本学学生において多かった(表15)。

### 4) 国際交流に関する気持ちや関心の程度について (表16)

現時点での国際交流や留学に関する主観的関心度や気持ちの程度を「VAS」にて回答を得たが、いずれの質問においても2群間に有意な違いが示された。「国際交流(または留学)に関心がある」, 「国

表13. 自分の大学の国際交流への意識と取り組について

	IPUHS			KMU		
	n	%	調整済み残差	n	%	調整済み残差
とても意識し、意欲的に取り組んでいる	3	2.8	-1.9	10	8.8	1.9
意識し、意欲的に取り組んでいる	39	35.8	-3.1	64	56.7	3.1
どちらでもない	48	44.0	2.6	31	27.4	-2.6
あまり意識しておらず、意欲的に取り組んでいない	17	15.6	2.0	8	7.1	-2.0
まったく意識しておらず、意欲的に取り組んでいない	2	1.8	1.4	0	0.0	-1.4
計	109	100		113	100.0	

$\chi^2$ 値=18.67, 自由度=4,  $p = .001$



表14. 今後、自分の大学へ期待する取り組みについて

(複数回答)	IPUHS			KMU		
	n	%	調整済み残差	n	%	調整済み残差
語学教育 (授業内・外)	31	27.9	-0.1	62	54.9	0.1
国際交流セミナー・シンポジウムの開催	9	0.8	-2.8	45	39.8	2.8
海外の学生研修 (留学生)の受け入れ	58	52.3	4.2	58	51.3	-4.2
海外の交流のある大学・病院への学生派遣	41	36.9	-1.6	103	91.2	1.6
在日 (在台) 外国人・留学生との交流事業	29	26.1	-0.8	66	58.4	0.8
その他	3	2.7	2.4	0	0.0	-2.4

$\chi^2$ 値=28.83, 自由度=5,  $p < .001$

表15. 自分の大学の学生の国際交流への意識・意欲について

	IPUHS			KMU		
	n	%	調整済み残差	n	%	調整済み残差
とても意識している・意欲的である	3	2.7	-2.4	12	10.6	2.4
意識している・意欲的である	24	21.6	-5.7	67	59.3	5.7
どちらでもない	57	51.4	4.2	27	23.9	-4.2
あまり意識していない・意欲的でない	21	18.9	2.9	7	6.2	-2.9
まったく意識していない・意欲的でない	6	5.4	2.5	0	0.0	-2.5
計	111	100		113	100.0	

$\chi^2$ 値=49.42, 自由度=4,  $p < .001$

表16. 国際交流に関する気持ち・関心度 (VAS)

	IPUHS (n=111)	KMU (n=113)	z値	有意確率
国際交流 (または留学) に関心がある.	55.5±26.9	79.2±18.2	6.818	$p < .001$
国際交流 (または留学) をしたい.	48.6±27.9	75.7±19.8	7.181	$p < .001$
国際交流 (または留学) に不安がある.	68.6±24.2	59.7±23.8	-3.038	.002
外国人と接するのは苦手である.	66.3±22.8	60.4±19.7	-2.397	.017
外国人と接すると緊張する.	70.9±23.1	61.5±22.7	-3.437	.001
外国人と接することにわくわくする.	56.8±22.5	69.7±16.1	4.438	$p < .001$
自分の大学での国際交流について興味を持っている.	51.4±23.0	68.5±19.2	5.617	$p < .001$
自分の大学での国際交流について参加したい.	49.5±23.3	68.5±19.3	6.176	$p < .001$
自分の大学での国際交流の内容について知りたい.	52.3±21.2	69.9±17.5	6.27	$p < .001$
第二言語 (英語, 韓国語, フランス語, ドイツ語, など) について学びたい.	56.4±23.2	82.7±14.7	8.615	$p < .001$
将来, 外国語で自由に討論 (医療のみならず) できるようになりたい.	55.0±25.4	74.7±18.5	5.882	$p < .001$
将来, いろいろな国の人と友達になりたい (友達をもちたい).	63.4±21.8	81.6±16.2	6.677	$p < .001$
国際協力に必要な知識・技術を学びたい.	61.2±20.2	74.6±19.5	4.96	$p < .001$

際交流 (または留学) をしたい」との関心や気持ちでは, KMU 学生において有意に強かった ( $z=6.818$ ,  $p < .001$ ;  $z=7.181$ ,  $p < .001$ )。また, 「外国人と接す

ることにわくわくする」, 「自分の大学での国際交流について興味を持っている」, 「自分の大学での国際交流について参加したい」, 「自分の大学での国際交

流の内容について知りたい]、「第二言語（英語，韓国語，フランス語，ドイツ語，など）について学びたい]、「将来，外国語で自由に討論（医療のみならず）できるようになりたい]、「将来，いろいろな国の人と友達になりたい（友達をもちたい]、「国際協力に必要な知識・技術を学びたい」などにおいて，本学学生に比べてKMU学生において有意に強い関心や気持ちがあることが示された（いずれも  $z=4.438, 5.617, 6.176, 6.27, 8.615, 5.882, 6.677, 4.96, p<.001$ ）。逆に，「国際交流（または留学）に不安がある]、「外国人と接するのは苦手である]、「外国人と接すると緊張する」の項目においては，KMU学生に比べ本学学生において有意に不安や苦手意識があることが示された（ $z=-3.038, p=.002$ ； $z=-2.397, p=.017$ ； $z=-3.437, p=.001$ ）。

### 【考察】

今回，本学作業療法学科学生（1～3年生）と高雄医学大学作業療法学科学生（1～3年生）に対して国際交流に関する意識調査を行った。その結果，本学学生と台湾学生では国際交流に関する意識に大きな違いがあることが示され，台湾学生において国際交流に関する意識や行動が有意に高いことが示された。これは，文部科学省の産学官によるグローバル人材の育成のための戦略の報告<sup>8)</sup>の中で示されているように，日本人である本学学生の国際交流や国外留学への意識は低く，「内向き傾向にある」ことが改めて明らかになったものと考えられる。

#### 1. 海外への渡航経験や外国人とのコミュニケーションとその機会について

海外への渡航において，本学学生に比べKMU学生では海外への渡航経験が有意に多く，また渡航回数も多いことが示された。逆に，本学学生では半数以上が海外への渡航経験を有していないことも明らかになった。この海外渡航経験の差は，今後の国際交流や国外留学・研修への参加などグローバル活動に影響を及ぼす可能性がある。廣岡<sup>9)</sup>は，海外旅行未経験者の特性の中で一回海外旅行へ行くと強い興味がなくとも，もう一度行こうとの意思が働きやすくなるが，一度も海外旅行の経験がない（未経験）

場合，興味があっても実際に行こうとすると逡巡してしまう可能性が多いことを述べている。このことは，今後本学学生において海外旅行や海外研修などへ興味を持ったとしても，実際に海外へ行ったり，海外研修への参加や留学したりするような実行性は高くない可能性が考えられる。一方，KMU学生においてはほとんどの学生（82.3%）が海外渡航経験を有しており，国際交流における活動への参加や国外留学・研修への参加において興味程度だけでなく，もう一度行こうといった意思が働きやすく，将来的にグローバルな活動を実行できる可能性が高いものと考えられる。

本学とKMUとの国際交流のなかで学生相互の訪問においても，平成28年（2016年）～平成29年（2017年）に本学学生がKMU（高雄医学大学）へ訪問する機会が3回あったが，実際に訪問交流した学生は16名（平均5.3名/回）であった。それに対してKMU学生（2015年～2017年）では36名（平均12名/回）が訪問来校しており，全員が過去に渡航経験を何回か有していた。実際に，過去の海外渡航経験が多いKMU学生の方がこうした留学や研修への参加者が多いことから，過去の海外渡航経験との関連性が示唆される。このように，若いうちの海外渡航経験の少なさが，日本人学生の海外留学の減少に影響をしている要因の一つである可能も考えられ，本学における今後のグローバル人材の育成を考えると，本学学生の海外渡航をできるだけ早期に経験できるようなプログラム（研修制度，単位認定や単位互換，助成金制度，など）を検討・充実していくことが重要であると考えられる。

次に，外国人とのコミュニケーションがとれる言語や交流する機会について，本学学生とKMU学生の間で有意な違いがあり，KMU学生（95.6%）ではコミュニケーションできる言語（英語）を有意に持っており，さらに外国人との交流機会も有意に多く有していた。このコミュニケーション言語については，海外渡航や海外研修・留学へ大きく影響を及ぼす因子と考えられ，日本人学生へのこうしたグローバル人材育成への阻害因子の一つとなっているものと考えられる。日本人にとって英語教育はそれなりの期間（中学から高校・大学）実施されてきているものの，日常的に英語を話す外国人と接する機会は少なく，コミュニケーションとしての英語の活

用ができない環境となっている。しかし、KMU学生では外国人との交流機会も多く（59.3%）、英語をコミュニケーション手段として活用する機会が多いことが示され、外国人とのコミュニケーションで英語を活用できる環境がそれなりに整っていることが伺える。そのため、英語が話せるから外国人と交流する、外国人が多くいるから英語を話す、といった好循環作用が生じ、KMU学生のコミュニケーションスキルの向上をもたらしているものと考えられた。実際、KMUでは授業においても英語の教科書・資料を多用し、また多くの海外留学生が来ており、日頃より英語に関わる時間や外国人と接する機会が多く、こうした環境がKMU学生のコミュニケーション力を高めているものと考えられた。

本学でも本学学生の外国人とのコミュニケーションスキルを高めるためには専門科目など授業の中で英語教材・海外（英語）文献の活用や積極的な海外留学生の受け入れによる交流機会の提供などを行っていくことが必要と考える。

## 2. 国際交流・国外留学に関する意識や関心、動機について

国際交流や国外留学に関する意識や関心・気持ちについて尋ねたところ、KMU学生は有意に意識しており、また「非常に関心」を持っていた。一方、本学では国際交流や留学を意識している学生は少なく、またそれらに関心を持っていない学生（どちらとも言えない・関心がない・全く関心がない）が多く示された。近年、日本において学生の海外留学者数の減少が報告されており、経済協力開発機構（OECD）における調査<sup>10)</sup>では海外で学ぶ日本人学生は2005年の82,945名をピークに年々減少し、2015年では54,676名となっている。一方で、日本学生支援機構による調査報告<sup>11)</sup>では、日本人の海外留学者数は平成15年（15,564名）以降年々増加傾向が示され、平成28年では96,641名に上っている。この増加傾向においては短期留学（1カ月未満）の割合（60,145名、62.2%）が急増し、全体の留学者数を増加させている。このように日本人学生は内向き傾向にあるといわれていたが、一部の報告では人数ベースにおいて短期的な留学を中心とした海外留学への関心は高まっていることが伺える。しかしながら、日本へ留学してくる外国人学生数は遥かに多

く、また増加傾向も著しく、平成29年度（2017年度）には267,042名の外国人が日本にて留学滞在している。本学とKMUの相互訪問交流においても、その期間は比較的短期的なものであるものの本学学生の訪問参加者は少なく、一方KMU学生の本学への訪問参加者は多く、本学学生の国際交流や留学などへの意識や関心がKMU学生よりも低いことが実際の行動としても示されている。これらの理由として、本学学生では国際交流をすることが自身へどのような意義があるのかを強くイメージできないことが影響している可能性がある。それは、国際交流が自身への意義の有無やどういった点で意義があるかとの回答においても、「意義がある」「とても意義がある」と回答した本学学生の人数はKMU学生より有意に少なく、逆に「どちらとも言えない」「意義がない」との回答は本学学生で有意に人数が多かった。更にもどのような点に意義があるかとの回答においても本学学生ではそれぞれの重要度（意義）は有意に低く、なかでも「国際感覚が学べる」「海外に行くときに役立つ」「外国人の友だちをつくる際に役立つ」といった回答でKMU学生より重要度（意義）が有意に低く（表6-2）、本学学生が国際交流から得られることについてしっかりとした認識やイメージができていないことを示唆しているものと考えられた。

それは、「どのような国際交流や留学がしたいか」との問いからも、本学学生とKMU学生との間で有意な違いが示され、各回答選択肢（内容）へ回答した本学学生の人数の少なさからも（表7）、国際交流のイメージや国際交流から得られることなどが十分に認識できずにいることが考えられた。日本人の海外留学の意義については、文部科学省<sup>12)</sup>は国際感覚を磨くこと、国際体験を通じた国際理解・知識の拡大、語学力の向上、国境を越えた幅広い人的ネットワークの形成、などを挙げている。また、医療系学生の国際交流（国外留学）における意義については、アジア諸国からの外国人看護師や介護士との協働の必要性や国内における外国人滞在者や観光者の増加に伴う外国人患者への対応頻度の増加が考えられる。更に、医療の世界は日々進歩しており、日本が優れている面もあれば、海外が進んでいる面もあり、海外の医療現場を見ることには非常に意義がある<sup>13)</sup>ことは容易に考えられる。

本学においても国際交流における交流事業やその

内容について、学生が国際交流を行うことで得られる付加価値を認識（イメージ）してもらえよう具体的な情報発信・提示（例、国際交流や海外研修の内容提示や訪問交流した学生・教員の体験報告などの情報・意見交換会、など）を行って行くことが、関心や意欲の低い学生に具体的なイメージや認識をしてもらうための重要な取り組みとして考えられる。

「国際交流や留学をするために準備していること」への問いに、KMU学生では「英語（英会話）の勉強」や「外国の文化や価値観などの勉強」、「外国へ行くための資金集め（バイト・貯金）」と回答する学生が多く、本学学生では圧倒的に「準備していない」と回答する学生が多かった。このことから本学学生の国際交流への意識や関心が低いことが伺える。国際交流や留学を進められない理由について比較したところ、「金銭的問題」、「言語的問題」、「自分の問題」、「環境の問題（家庭や学校、カリキュラム）」を本学学生は有意に障壁（問題）として認識しており、本学学生が国際交流を行うにはこれら障壁と考えている問題（要因）を軽減していく支援も必要であることが示唆された。将来、海外への留学や就職の希望についてもKMU学生で有意に多く、86.7%の学生が海外留学や就職を考えていた。その目的としてもKMU学生では「自分の知識や技術などをより高めたいため」が最も多く、医療専門職としての更なる向上の機会を意識していることが伺えた。またその他に「海外で暮らしてみたいため」や「海外で友達をつくりたいため」とする目的も多く、医療とは関係なく自分（人間）の幅を広げようとする意識があるように感じられる。それらは、「海外での学生研修に経済的な負担がなければ参加したいか」との問いにも反映されており、KMU学生では「ぜひ参加したい」と回答する学生が有意に多く、国際交流により様々な経験や人との交流によって上記のような目的（目標）を叶えたいとの意識が参加意欲を高めているものと考えられた。逆に本学学生では「どちらでもない」「あまり参加したくない」「全く参加したくない」と回答した学生が有意に多く、また海外留学や就職の希望に関しても本学学生では回答率が11.7%（13名）と低く、「経済的な問題」よりも国際交流や海外留学への意欲や関心が改めて低く、文科省が示すような海外への留学や就職から

得られるものをイメージできないことを示唆しているもとと考えられた。

このように、KMU学生に比べ本学学生の国際交流や国外留学（研修）への意識や関心は低く、今後グローバルな人材を育成していくには、本学学生が障壁と考えている問題（言語的問題や自分の問題、環境の問題、など）を軽減させる取り組みや国際交流・海外研修から得られるもののイメージや研修（活動）内容などを具体的に認識してもらえよう取り組みを検討・実施しなければならないものと考えられた。

### 3. それぞれの大学における国際交流に関する取り組みについて

それぞれの学生に、自身が所属する大学の国際交流への意識や取り組みに関する質問を行ったところ、本学学生とKMU学生との間で有意な違いが示され、「とても意識し、意欲的に取り組んでいる」「意識し、意欲的に取り組んでいる」との回答においてKMU学生で多く示された。これはKMUでは大学としての取り組みが学生に実感され見える形となっていることを示しているものと考えられ、国際交流が学生にとって身近なものであることが伺えた。また、大学へ期待する取り組みについての回答でも有意な違いが示され、KMU学生は自身の大学に「語学教育（授業内・外）」や「国際交流セミナー・シンポジウムの開催」など自国内での交流機会のみならず、「海外の交流のある大学・病院への学生派遣」など自国外での交流の機会にも多くの学生が期待しており、自国内・外問わず国際交流できる機会を多く求めていることが示唆された。一方、本学学生では、「海外の学生研修（留学生）の受け入れ」や「在日外国人・留学生との交流事業」などを期待する学生が多く、比較的自国内での国際交流を希望する傾向にあることが伺えた。

さらに、自身の大学の学生の国際交流への意識や意欲についての問いにおいても有意な違いが示され、KMU学生において「とても意識している・意欲的である」「意識している・意欲的である」との回答学生が多く、大学と同じように多くのKMU学生は自分以外の学生も国際交流への意識や意欲を持っていると考えていることが伺え、学生同士の相互作用も国際交流への意識へ影響しているものと考え

えられた。一方、本学学生では「どちらでもない」「あまり意識していない・意欲的でない」「まったく意識していない・意欲的でない」との回答学生が多く、本学学生は他の学生もあまり国際交流を意識していないものと考えていることが示され、学生間の相互作用（影響）はあまり期待できず、場合によっては負の影響（他の学生も関心がないので、自分もあまり意識しなくてもよい）となっている可能性も考えられた。

#### 4. 国際交流に関する気持ちや関心の程度について

本学学生においては、「国際交流（または留学）に不安がある」「外国人と接するのは苦手である」「外国人と接すると緊張する」との問いかけに対して有意に不安や苦手感・緊張感が高く、逆に「外国人と接することにわくわくする」との問いかけには有意に期待感が低く、国際交流を行うにあたり基礎的な側面においてKMU学生より問題となっていることが伺われた。これは、大学における国際交流の取り組みとも関連し、KMUでは海外からの多くの留学生の受入れや国際交流事業（海外からの招聘講演など）を展開しており、KMU学生の意識の中や身近な学生生活の中で外国人と接する機会などがそれなりにあるが、本学学生では大学自体の取り組みも少なく、また留学生など学生生活の中に外国人がいることを身近に感じることはほとんどなく、そういった環境の違いによる要因がこうした外国人とのコミュニケーションのハードルを低くできないものと考えられた。

「国際交流への関心、意欲、参加」や「外国語での自由な討論」、「いろいろな国の人と友達になりたい」、「国際協力に必要な知識・技術を学びたい」などにおいてはKMU学生で有意に関心や気持ちが高く、自身の国際化への積極的な姿勢が伺え、逆に本学学生では自身の国際化へは消極的な姿勢（内向き傾向）であることが改めて示されているものと考えられた。

今回、KMU学生と本学学生との間で、国際交流に関する意識調査の結果や比較より、本学学生に対するグローバル人材育成への課題が改めて浮き彫りになったものと考えられる。

今後は、本学学生の意識を高め、また障壁と考えている問題（要因）を軽減するために、国際交流や

海外研修の具体的な内容に関する情報提供や海外研修、海外の大学との交流機会の積極的な設定、また本学での外国人との交流や接する場面を多く作っていくなど、本学学生が国際交流やそのイメージ（活動内容や得られる意義）などを実感できるような取り組みを行うと同時に、支援体制やプログラムの充実など大学として実行していくことが必要で重要なことと考える。

#### 【謝辞】

本研究は、茨城県立医療大学奨励研究（平成27年度）及びプロジェクト研究（1654-1）の助成を受けて行われた。

#### 【文献】

- 1) 厚生労働省. 経済連携協定（EPA）に基づく外国人看護師・介護福祉士候補者の受入れ概要. [http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11650000-Shokugyouanteikyokuhakenyukiroudoutaisakubu/epa\\_base\\_2909.pdf](http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11650000-Shokugyouanteikyokuhakenyukiroudoutaisakubu/epa_base_2909.pdf)（参照2018-04-11）
- 2) 公益社団法人国際厚生事業団 専務理事角田隆. 外国人介護士の現状～EPAによる受入れを中心として～平成29年4月20日（木）[http://www.mcw-forum.or.jp/image\\_report/DL/20170420-1.pdf](http://www.mcw-forum.or.jp/image_report/DL/20170420-1.pdf)（参照2018-04-11）
- 3) 厚生労働省. 経済連携協定（EPA）に基づく外国人看護師候補者の看護師国家試験の結果（過去10年間）<http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-10805000-Iseikyoku-Kangoka/0000157982.pdf>（参照2018-04-11）
- 4) 濱畑章子, 片岡由美子, 米田雅彦, 平井さよ子, 古田加代子, 原沢優子, 星野順子. 看護学生の国際交流に関する意識調査. 愛知県立看護大学紀要. 2004; 10: 27-32
- 5) 三原博光. 県立広島大学のドイツ短期海外研修教育効果の検証－研修参加者への質問調査を通じて－. ウェブマガジン『留学交流』2017年2月号. Vol.71 p10-20. [https://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2016/\\_icsFiles/afie](https://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2016/_icsFiles/afie)

- ldfile/2017/02/08/201702miharahiromitsu.pdf (参照2018-04-11)
- 6) 高橋亜紀子. 日本学生と留学生の合同授業の取り組み－教員養成大学で行った授業の実践報告－. ウェブマガジン『留学交流』2014年3月号. Vol.36 p1-7. [https://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2013/\\_icsFiles/afieldfile/2015/10/23/201403takahashiakiko.pdf](https://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2013/_icsFiles/afieldfile/2015/10/23/201403takahashiakiko.pdf) (参照2018-04-11)
- 7) 一般社団法人 日本作業療法士協会. (一社) 日本作業療法士協会「作業療法士教育の最低基準」改訂第3版. <http://www.jaot.or.jp/wp-content/uploads/2013/12/OTmimumstandard-3nd1.pdf> (参照2018-04-11)
- 8) 文部科学省. 産学官によるグローバル人材の育成のための戦略. 平成23年4月23日 [http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2011/06/01/1301460\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2011/06/01/1301460_1.pdf) (参照2018-04-18)
- 9) 廣岡祐一. 「若者の海外旅行離れ」に関する考察. [http://www.jata-net.or.jp/vwc/pdf/0809tm\\_databis.pdf](http://www.jata-net.or.jp/vwc/pdf/0809tm_databis.pdf) (参照2018-04-18)
- 10) 文部科学省. 日本人の海外留学状況. [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/ryugaku/\\_icsFiles/afieldfile/2017/12/27/1345878\\_02.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/_icsFiles/afieldfile/2017/12/27/1345878_02.pdf) (参照2018-04-18)
- 11) 日本学生支援機構. 平成28年度協定等に基づく日本人学生留学状況調査結果. [https://www.jasso.go.jp/sp/about/statistics/intl\\_students/2017/index.html#no1](https://www.jasso.go.jp/sp/about/statistics/intl_students/2017/index.html#no1) (参照2018-04-18)
- 12) 文部科学省. 日本人の海外留学. [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/attach/1249709.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/attach/1249709.htm) (参照2018-04-18)
- 13) 具然和. 大学の国際化社会への取り組み－アジア諸国との国際交流－. 純真学園大学雑誌. 2016 ; 5 : 19 – 30

## An Attitude Survey of Occupational Therapy Students in Japan and Taiwan towards International Exchanges

Hideki Shiraishi<sup>1)</sup>, Wen-Lin Tung, Neil David Parry<sup>2)</sup>, Ying-Chun Chou<sup>3)</sup>

<sup>1)</sup> Department of Occupational Therapy, Ibaraki Prefectural University of Health Sciences

<sup>2)</sup> Center for Humanities and Sciences, Ibaraki Prefectural University of Health Sciences

<sup>3)</sup> Department of Occupational Therapy, Kaohsiung Medical University

### Abstract

**Purpose:** The purpose of this study was to determine the difference in attitudes towards international exchanges between occupational therapy (OT) students in Japan and Taiwan. **Subjects:** 111 Japanese OT students of Ibaraki Prefectural University of Health Sciences (IPUHS) and 113 Taiwanese OT students of Kaohsiung Medical University (KMU) participated in this study. **Method:** A questionnaire on international exchanges we made was used. **Results:** The time and experiences of traveling abroad of IPUHS OT students are significantly less than those of KMU OT students. Additionally, communication languages with foreigners in IPUHS OT students are significantly fewer than those of KMU OT students. Furthermore, IPUHS OT students showed significantly lower scores for most items on attitudes and consideration for international exchanges than KMU OT students. **Conclusion:** The results suggested that IPUHS OT students have little interest in international exchanges. The results also showed that IPUHS OT students are introverted. To facilitate collaboration with foreign medical professionals in future, it is necessary for IPUHS OT students to maximize opportunities while at university to communicate and spend time with foreign medical students through the international exchange program.

**Key words:** International exchanges, Occupational therapy students, Japan, Taiwan, Questionnaire survey

